



Dolmetschen 通訳という仕事

Notizentechnik für Konsekutivdolmetscher

逐次通訳者のためのメモ技術

Bettina Ortmann

番組では、次のテキストを実際に読み上げてもらいます。

Wir alle müssen darum kämpfen, dass die Menschenrechte in unseren Ländern gewahrt und umgesetzt werden.
 Einen Krieg kann man mit militärischen Mitteln gewinnen — aber nicht den Frieden.
 Dauerhafte und stabile Sicherheit ist erst dann gewährleistet, wenn die Menschenrechte und Grundfreiheiten anerkannt und weltweit geachtet werden.

(訳は56ページをご覧ください。)

このテキストを聞いて私が書いたメモは、次のようなものでした。

<p>we</p> <p>!</p> <p>X</p> <p>x</p> <p>⌘</p> <p>in</p> <p>ns</p> <p>○</p>	<p>⌘</p> <p>? V</p> <p>m/</p> <p>⌘</p> <p>⌘</p> <p>↘</p> <p>↘</p> <p>↘</p> <p>if</p> <p>⌘</p> <p>↓</p> <p>⊕</p>
--	---

●apropos Kultur!●

左の図で使用されているSymbol (記号) を解説してみましょう。

we wir に相当する英語。

- ! 感嘆符は、「～しなくてはならない」の意。
- X 2つの剣が交わっている記号は「戦い」を表す。
- × イタリア語由来。×はper (ドイツ語のfürに相当) を表す。
- ⌘ 線で描いた簡略記号で「人間」を表す。
- § § (パラグラフ) は法律の条項に使う記号であることから「法律」や「法」を表す。
- ⌘ 「守る」を表す。
- ⌘ 3つの記号を組み合わせて「人権を守る」。
- ns イタリア語の „nostro“ (ドイツ語の unser) に由来する記号で「われわれの」
- 「国」を表す。
- ⌘ 抽象名詞化することを示す半円を用いて「戦争」を表す。
- ? V V はヴィクトリーに由来して「勝利する」ことを表すが、疑問符は「もしかすると」という留保を付している。
- m/ 英語で (前置詞を記号化する) w/ という書き方をするのに準じて m/、すなわち、mit の略号。
- ⌘ 銃口を描くことで、「武器」、あるいは「武力によって」という意味を表す。
- ⌘ ベンチを描くことで「道具」、「手段」を表す。
- ⌘ 2つの記号を組み合わせて「武力という手段」を表す。
- ↘ この記号で連想しているのは、誰かが話している (↘) のに対して異議が唱えられストップがかかる (↘) 様子、すなわち、「しかし」。
- ⌘ ラテン語の Pax, すなわち「平和」。
- ⌘ 斜め線により消されているので、「平和が存在しないこと」。
- 「ずっと」、「永続的」の意。
- ⌘ この記号で連想しているのは、誰かが一本足で石の上に立っていて、落ちないようにバランスを保っていないとではないという様子、だから「安定している」という様子を表す。
- ⌘ この記号で連想しているのは、洞窟の中で安全に隠れている様子であり、だから「安全、セキュリティ」を表す。
- ⌘ 「ただ～のみ」。
- if 英語の if を用いて「もし～ならば」。
- ↓ 地面に向かう矢印は「地面、基本」を表し、大文字のLは英語の Liberty、即ち「自由」を表すので、両者を組み合わせて「基本的自由」。
- ⊕ 地球を描いた記号は「世界」を表す。

Die Notizentechnik ist ein unentbehrliches Mittel, um eine Rede beim Konsekutivdolmetschen zeitsparend und effizient zu notieren. Mit Hilfe von Symbolen und Abkürzungen können Sätze auf ein Minimum reduziert und zu Papier gebracht werden.

Es gibt keine allgemeingültigen Symbole, wenn auch einige Grundsymbole (z.B. für „Mensch“, „Welt“) wohl von den meisten Dolmetschern benutzt und auch an den meisten Unis gelehrt werden. Doch jeder hat seine ganz persönliche Notizentechnik, denn auch das Gedächtnis ist individuell unterschiedlich. Die einen können sich Bilder sehr gut merken (visuelles Gedächtnis), die anderen eben nicht. Das muss jeder für sich ausprobieren. Und schließlich lebt die individuelle Notizentechnik von den eigenen Assoziationen. Man darf ruhig kreativ werden und seiner Fantasie freien Lauf lassen! (siehe Symbol für „stabil“, „Sicherheit“, „aber“.)

Apropos Gedächtnis — die Notizentechnik soll und darf nicht das Gedächtnis ersetzen! Sie dient ausschließlich als Gedächtnisstütze, und so sollen im besten Falle Stichwörter die Gedächtnisleistung aktivieren und das Gehörte wieder hervorrufen.

Warum lernt man nicht einfach Stenographie? Diese Frage wird oft gestellt. Das hängt mit dem Grundprinzip des Dolmetschens zusammen, nämlich der sinngemäßen Übertragung der Botschaft, keine wörtliche Übersetzung. Es ist also wichtig, dass die Notation sprachunabhängig stattfindet. Hätte man also die Rede Wort für Wort stenographiert, müsste man das Notierte lesen, im Kopf übersetzen und wiedergeben, während mit Hilfe der Notizentechnik ganze Sätze auf einen Blick erfasst werden und eigentlich schon in der Zielsprache im Kopf vorhanden sind und wiedergegeben werden können, da sie mittels Symbolen sprachunabhängig sind, und daher nicht erst übersetzt werden müssen. Außerdem kann dieselbe Notizentechnik für sämtliche Sprachkombinationen eingesetzt werden, sei es aus dem Deutschen ins Japanische, oder aus dem Englischen ins Deutsche etc.

Durch den Rand, in den das Satzsubjekt oder auch Zeitangaben und vor allem Sinnverknüpfungen (Konjunktionen wie „aber“, „weil“, „dennoch“, usw.) notiert werden, kann man seine Notizen gut strukturieren. Auch wird nicht von links nach rechts notiert, sondern eher diagonal von oben links nach unten rechts. Das alles hilft dem Auge, die Satzstruktur leichter zu erfassen. Verben werden nur notiert, wenn sie sinntragend sind — falls sie in einer Kollokation stehen und aus dem Kontext hervorgehen (z.B. „Menschenrechte respektieren, achten, wahren“), können sie weggelassen werden, oder auch durch die Substantivnotierung ausgedrückt werden (siehe „Schutz der Menschenrechte“).

Und wer die Notizentechnik lernen will — für den gilt das Sprichwort „Übung macht den Meister“!

メモ技術は、スピーチを逐次通訳する際にすばやく効率的にメモを取るために欠かすことのできない手段です。さまざまな記号や略号を使って、文章を最小の要素へと切り詰め、紙に書き留めることができるのです。

とはいえ、誰もが使う共通の記号というものは存在しません。たしかに、(たとえば「人間」とか「世界」のような)いくつかの基本記号については、おそらくほとんどの通訳者が使っているものであり、またたいていの大学でも教えられているものではありません。しかし通訳者のそれぞれが、自分だけのメモ技術を持っています。というのも、人の記憶もまた人それぞれで異なっているからです。イメージを覚えるのが得意な人(視覚型の記憶)もいれば、それが苦手な人もいます。どのやり方が自分に向いているかは、ひとりひとりが自分でいろいろ試してみなければなりません。結局のところ、各人のメモ技術を支えているのは、その人の想像力なのです。いくらでも創造性を発揮し、自由な発想にまかせればよいのです! (「安定した」、「安全保障」、「しかし」といった記号を参照。)

ところで記憶力という点について申しあげておきたいのですが、メモ技術というものは、記憶の代わりとなるべきものではありませんし、あってはなりません。メモ技術はあくまでも記憶の補助手段として用いられるのです。せいぜいのところ、メモしておいたキーワードのおかげで記憶の働きが活性化され、聞いた内容を再び思い出させてくれる、ということに過ぎません。

なぜ単に速記術を習うことですませないのか? よくこう停ねられます。なぜ速記術ではダメなのかという点は、通訳の基本原則と深く関わっています。つまり、通訳の基本原則とは、メッセージの意味を伝えるということであって、一語一語を訳すというものではないのです。ですから、メモは言語に左右されない形で筆記されることが重要です。もしスピーチの一字一句を速記で書き留めたならば、筆記されたものを読み、頭の中で翻訳し、それを再現するという作業が必要になります。しかしメモ技術を用いるなら、文章全体が一目で把握できますし、頭の中ですでに訳出される言語でできあがっていて、それを再現すればよいのです。こうしたことができるのも、メモが各記号のおかげで言語とは無関係に構成されており、したがって改めて訳される必要がないからです。さらに、どんな言語の組み合わせに際しても、同一のメモ技術を使えます。同じメモ技術で、ドイツ語から日本語へ訳す場合でも、英語からドイツ語へ訳す場合でも、メモを取れるというわけです。

メモに際しては左右に欄を分けて、左欄には文の主語、時を示す語、そしてとりわけ意味のつながりを表す語(「しかし」、「なぜならば」、「にもかかわらず」といった接続詞)を記します。この左欄のおかげで、メモに構造を与えることができます。またメモは、左から右に向けてではなく、左上から右下に向かって対角線を引くようにノートします。これらはすべて、文の構造を一目で把握できるための助けとなります。動詞をメモするのは、その動詞が文意を一身に担っているときに限られます。動詞が他の語と組み合わせられて用いられている場合や、文脈から明かである場合(例えば「人権を尊重する、遵守する、守る」といった場合)には、省略することができますし、動詞を名詞化してメモすることもできます(「人権保護」というような形に変えるやり方を参照)。

メモ技術をマスターしたい方へのアドバイスです — 「練習がマイスターを作る」ということわざどおり、練習の積み重ねが何より大切ですよ!


Dolmetschen 通訳という仕事

通訳という仕事(2)

相澤啓一の解説

よい通訳とは？

通訳をする上で一番難しいのは何でしょう？ 常識的に考えれば「外国語が難しい」こと、という結論になるかもしれませんが。たしかに通訳者は自分の外国語能力を母語に匹敵するレベルにまで高めなくてはならないのですから、読解・聴解・速読・正確な発音といった語学力を伸ばすためにたゆまぬ修練が必要なのは当然です。しかし、ほんとうに難しいのはむしろ外国語以外の部分にこそあります。

たとえば、大きな課題の一つとなるのは母語能力の向上です。例えばドイツ人だからといってドイツ語を誰もが同じようにできるわけではなく、母語能力には人によって驚くほど大きなバラツキがあります。会議通訳者は、自分が日頃知らない話題についての専門的なテキストや抽象的内容の原稿をも素早く大量に理解し、また外国語から理解した内容を正確な母語で論理的にアウトプットしていけるよう、日常的に母語能力を磨いておかななくてはなりません。

そうした言語能力というものは、しかし最終的には、個々の話題の内容と切り離された地点で抽象的に存在するものではありません。通訳という営みが最も誤解されているのはおそらくこの点ではないでしょうか？ というのも、通訳者を「単に言葉ができるだけの特殊技能者に過ぎない」と限定的に位置づけようとして「通訳者が知識や教養を持っていると、自分の考えが邪魔をして通訳に差し支えることはないか？」(1998年、文部省国語審議会での委員発言) などといった疑問を持つ人はいまだに多いからです。

しかし実際には、内容理解を伴わない通訳はあり得ません。理解していないテーマについては訳せないのです。だから通訳者は、自分が通訳する専門会議のテーマと内容を、たとえ素人としてであれ、可能な限り理解しなくてはなりません。わざわざその道の専門家が集まって開く国際会議であれば、最先端の専門的テーマが扱われることも少なくなく、事前準備は時として困難を極めます。専門用語を調べるのに市販の独和辞典はほとんど役に立ちませんから、通訳者は独独自の専門書をかき集めて照らし合わせ、自分の持つあらゆる知的アンテナを駆使して、できる限りの必要知識を収集し、会議当日に登場しそうな専門用語をカバーするよう努めなくてはなりません。一回の会議通訳の準備をすると、自分だけの単語帳の中に、母語でも聞いたことのないような専門用語が数十、場合によっては数百の単位で増えていきます。プロの会議通訳者はこうした準備を重ねた上で、例えば首脳会見、公的年金制度、気候変動枠組条約、畜産廃棄物処理、表現主義舞踊、過去の克服、カントと平和、二酸化炭素削減

● apropos Kultur! ●

減のためのスラグセメント、自動車エンジンの金型、といった多種多様なテーマを、日々こなしていくことになるわけです。

加えて、通訳行為は常に一種の異文化間の媒介作業ですから、さまざまな要素に瞬時に気を配る高度な判断力も要求されます。それは例えば、次のようなものです。

- もとのメッセージの中の異文化性をどの程度残して訳すのか？ (起点言語に忠実に訳せば、わかりづらかったりカルチャーショックを誘発したりするアウトプットになりかねない。逆に目標言語に合わせてしまうと、穏当でわかりやすい表現にはなるだろうが、もとのメッセージの多くの部分が失われてしまいかねない。)
- 日本語に特に多い同音異義語を誤解したり、誤解される可能性がある単語を選んで話したりしていないか？ (例えば、「そこにゾウが立っています」という発言を **Da steht ein Elefant** と訳してしまった後で、実際のスライドを見てみたら何かの「銅像」だった、という場合、フォローのしようがない！)
- 訳した用語や概念に通訳上の説明を要しないか？ (例えば、伝統的に「経営評議会」と誤訳され続けてきている **Betriebsrat** がいかなるものであるかを訳文の中で説明しておく必要はないか？)
- 聴衆が誰なのか？ (専門家集団なのか、それとも一般聴衆なのか、高齢者中心なのか子供たちが多いのか？ それにより用語や文体をどう使い分けるか？)
- 発言者が言い間違いや不規則発言を行なったときにどう対処するか？

通訳者は、単に「言葉を訳す」だけにとどまらず、これら異文化間コミュニケーションに関する難問の数々に対して一人で瞬時に判断を下し、数多くの選択肢の中からその場のTPOに合わせて最善の訳文を作り出していかねばなりません。その意味で、通訳者となるために必要な最初の一步は、中学校以来の語学教育の枠の中で培われてきた「正解のある逐語訳」という硬直した訳文イメージからの脱却です。私たちは誰しも、原文がわからなくなると「困ったときの辞書頼み」というわけで、辞書の訳語を並べて訳文を作ってしまう傾向がありますが、そうした訳文は通訳の現場ではたいてい全く使い物になりません。そんなときこそ、発言者が何をメッセージとして訴えようとしているのか、頭を柔軟に働かせて意を汲み取っていく姿勢が求められるのです。

どのように通訳すべきか、という絶対的な正解はありません。誤解を恐れずに言うなら、究極の通訳というのは、発言者が伝えようとしているメッセージを、通訳者が発言者と一緒になって伝えようとする情熱を傾ける所に生まれる個人芸の世界であると言えるでしょう。メモの取り方が通訳者ひとりひとりで異なるのもそのためです。そうした苦勞が報われて、発言者と聴衆の間にしっかりと意志疎通が成立するとき、それこそは「通訳者として仕事をしてよかった」と思える通訳者冥利に尽きる瞬間です。今週もそうした通訳の醍醐味について、

Dolmetschen 通訳という仕事

● **apropos Kultur!** ●

異言語・異文化間コミュニケーションの最先端で活躍するベッティーナさんと蔵原さんに、お伺いすることとしましょう。

なお、通訳全般の問題については米原万里さんの『不実な美女か貞淑な醜女か』や鳥飼玖美子さんの『歴史を変えた誤訳』（いずれも新潮文庫）の中でさまざまなエピソードをまじえて楽しく論じられていますし、翻訳に関しては山岡洋一氏の『翻訳とは何か』（日外アソシエーツ）がとても参考になります。日独通訳については、『異文化間コミュニケーションにおける通訳者』（月刊『言語』1997年8月号）や『日独通訳とドイツ語教育』（松野和彦・吉島茂編『外国語教育 理論から実践まで』所収、朝日出版社）に相澤が詳しく書いたことがありますので、こちらもご参照ください。



2005
3月23日(水)
Mittwoch, 23. März

3月28日(月)
Montag, 28. März

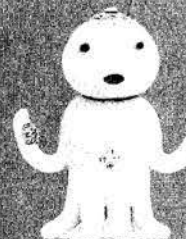
★ **ナターシャのドイツ語塾** ★

25 Grund-Sätze **Nr. 24**
基本表現

「**そうかもね**」 +
Nr. 17~23の復習



Pipos Abenteuer **ピポの大冒険!**



④ **Pipo muss zurück!**

突然ピポに、火星のお父さんから早く帰るようにと連絡が入りました。

今週学ぶのは：接続法第Ⅱ式による非現実話法
「もし~だったら、…するのになあ」の文

apropos Kultur!

料理

牛肉をダイナミックに使うシンプルな料理を紹介。

Tellerfleisch

